

2008年度春季大会シンポジウム 「海洋観測が切り拓く気候システム科学」の報告

はじめに

河 宮 未知生*

エルニーニョや地球温暖化など、数年より長い時間スケールで気候の変動・変化を予測するためには、海洋亜表層以深の観測データが本質的に重要となる。また熱帯における Madden-Julian (MJ) 振動など、海洋上で発生する短周期現象の機構解明のためには高い時空間分解能をもつ海洋観測網が不可欠である。近年、こうした認識と技術革新があいまって、海洋観測データの量と質は大幅に向上している。このような背景のもと、港湾都市として海と深く関わりながら発展してきた横浜市に会場を置いた日本気象学会2008年度春季大会において、海洋観測を主題とするシンポジウムが開催された。

本シンポジウムでは、まず海洋観測技術の進歩の象徴とも言える Argo について、これまでの成果と今後の方向性を須賀利雄氏が概観した。次に、Argo で取得されたデータも含め、蓄積された海洋データがどのように品質管理され解析の信頼性向上につながってい

るかを石井正好氏が示した。続いて、海洋観測計画と数値シミュレーション研究との連携が奏功した実例として、熱帯インド洋の観測計画 MISMO と全球雲解像モデル NICAM の成果について米山邦夫氏と佐藤正樹氏がそれぞれ説明を行った。最後に、温暖化の影響が最も顕著に表れると考えられている北極圏の変化について、海水量変化の観点から島田浩二氏が解説を行った。

講演後の質疑応答や討論では活発な議論が交わされた。本シンポジウムを通じ、大気・海洋などさまざまな構成要素間の相互作用の総体である「気候システム」において海洋観測が果たす役割について、会員諸氏の認識が深まったことを願っている。

(編集委員会より：諸般の事情により、掲載が遅れてしまいましたこと、ここに心よりお詫び申し上げます。)

* 海洋研究開発機構地球環境変動領域。

—2009年2月23日受領—

—2010年7月23日受理—

Climate System Science Pioneered by Ocean Observations
(A Report on the Symposium of the 2008 Spring
Assembly of the Meteorological Society of Japan).

Michio KAWAMIYA*

* *Research Institute for Global Change, Japan Agency for Marine–Earth Science and Technology, 3173–25, Showa–machi, Kanazawa–ku, Yokohama, Kanagawa, 236–0001, Japan.*

(Received 23 February 2009 ; Accepted 23 July 2010)

Contents

1. Toshio SUGA : Argo : Its Accomplishment and Potential.
 2. Masayoshi ISHII : Oceanic Climate Changes in Historical Observations and the Reproduction of the 20th Century Climate by Data Assimilation.
 3. Kunio YONEYAMA : Past, Present, and Future of the Intensive Field Experiment MISMO in the Indian Ocean.
 4. Masaki SATOH : Numerical Simulations of MISMO–MJO by the Global Cloud–Resolving Model NICAM.
 5. Koji SHIMADA, Takashi KAMOSHIDA, Jun INOUE, Motoyo ITOH, Kohei MIZOBATA and Masahiro HORI : Catastrophic Changes in the Arctic Ocean.
-